

近代エジプトの遊牧民

——「オマル・マスリーの反乱」聞き取り調査ノート——

解説

私は、先に、十九世紀中葉におけるサイドド治世（一八五四—一八六三年）の一〇年間にわたってエジプト政府を悩ませた遊牧民の反乱の伝承を紹介し、そこにみられる近代エジプトの遊牧民の境遇を、国家権力との関係から、また同じ時期の農民の境遇との比較から分析した。この遊牧民の反乱とは、リビア砂漠のオアシス地方へとつながる中エジプト地方のミニヤ、ファイユーム地方に大きな影響力を持った、ジャワーズィー族 (qabila) の首長 (shaykh) オマル・マスリーを指導者とした反乱である。

加藤 博

この反乱の指導者オマル・マスリーは、サイドドの治世を通して、公文書のなかで、「お尋ね者」(shaqi) と呼ばれている。国家は諜報員を全国に放つなどの行動について情報を得るのに躍起となり、彼を匿う協力者に対しては処刑を含む厳罰をもって臨んだ。また、彼の所在が確認された時には正規軍を派遣した。両者の対立のハイライトはダハラ・オアシス地方のバラートという村落での戦闘であり、この戦闘には三〇〇名以上のエジプト正規軍が参加し、戦闘とその後、処刑によって大量の血が流された。しかし、オマル・マスリーはその後各地を点々とし、最終的には、東部リビアのキレナイカ地方に逃げおおせた。

ところで、この「お尋ね者」オマル・マスリーは、先に指摘した伝承では、「お尋ね者」ならぬ、当局以外の「素人」には決して手を出さぬ「英雄」(zaim)として自らを主張し、またそのように扱われている。そして、この「英雄」オマル・マスリーが時の権力者サイドに反旗を翻した理由は、サイドがそれまでの慣行を破って徴兵の対象を遊牧民にまで広げたことであつた。伝承はこの対立を次のような誠に興味深い逸話でもって説明している。つまり、サイドが徴兵の対象を遊牧民にまで広げたとき、オマル・マスリーはこの措置を受け入れる条件として、彼の部族民は軍配属後も彼らの慣習通り、重く長い房のついたマグリブ帽 (barbush maghribi) に象徴される伝統的衣を着る権利をもつと主張したのに対して、サイドはあくまで、彼らが軍の規律通り、エジプト国民軍の制服を着用すべきことを要求したため、両者は対立したというのである。

かくて、反乱が発生したが、この反乱はサイドの治世においては終焉をみず、その解決はサイドの後

を継いだイスマイル(在位一八六三—七九年)に委ねられた。つまり、イスマイルはエジプト総督に就任するや、遊牧民問題の抜本的解決をはかり、彼らと平和協定を結ぶとともに、遊牧民の首長たちを地方行政機構に取り込んでいく。反乱の指導者オマル・マスリーもリビアからエジプトへの帰還を許される。この事実を、伝承では、エジプト・リビア国境地帯での保護 (dhimya) 権、つまり治安維持を条件とした通行税の徴収権の授与によるエジプト政府のオマル・マスリーに対する事実上の敗北と表現している。以後、エジプトでは、大規模な遊牧民反乱は姿を消す。

このように、オマル・マスリーの反乱は、ただ単に一遊牧部族の反乱にとどまらず、エジプトの全遊牧民の境遇、とりわけその対国家関係において決定的転換点となった大事件であつた。ところが、どういうわけか、この事件はこれまで全くといっていいほど研究の対象にされてこなかった。このことは、誠に不思議なことである。なぜこの事件はアカデミズムのなかで無視されてきたのか、そして何よりも、この事件の真相

はどのようなものであったのか。これらの点を少しでも明らかにするため、私は現在、オマル・マスリーの反乱に関する研究として、次の三つを計画している。

第一は、十九世紀に公布された遊牧民関係法令、勅令を収集し、その分析によって近代エジプトにおける遊牧民の境遇の推移を跡づけることである。これら法令、勅令は遊牧民問題一般を扱っているのがほとんどであるため、事件としてのオマル・マスリーの反乱については直接的な資料とはなり得ないだろう。しかし、それらは、いわば「状況証拠」として、この反乱発生の歴史的、制度的背景を探る資料とはなり得よう。

第二は、先に指摘した伝承が収められている遊牧部族系図などの刊本のほか、『エジプト総督内閣官房文書』(mahady ma'ya san'ya)を中心とした文書群のなかの、オマル・マスリーの反乱に関係した記述を収集し、この反乱の史実をできる限り再構成することである。これが「オマル・マスリーの反乱」研究の最も重要な作業になるが、ことこの事件の評価にとって決定的に重要な反乱の原因と結末に関する情報について

は、余り期待がもてない。というのも、その資料の性格から、そこには、例えばいつどこで戦闘があり、どのような人々が何人死に、処刑されたかなど、反乱の経過についての情報は多いが、そもそもこの反乱がなぜ起きたのか、またこの反乱はどのような結末をみたのかなど、反乱発生の社会的背景、反乱の与えた社会的影響を窺わせる情報はきわめて少ないからである。

そのため、この点に関しては、第一の法令、勅令に基づく「状況証拠」分析に大いに依拠する必要があるが、それとともに、第三の作業としてオマル・マスリーの子孫を始めとした関係者に対する聞き取り調査を実施する。もっとも、こと反乱の原因と結末に関する限り、この調査方法からも多くの情報を期待できないかもしれない。しかし、関係者たちがオマル・マスリーの反乱のどこにこだわっているか、もっと端的に言えば何を誇張し、何を喋らず、さらには何を嘘ついているかを通して、少なくとも関係者からみた反乱の意義づけを知ることができるだろう。と同時に、彼らの話から、こうした真相の解明の次元とは別に、農民と

は全く違う遊牧民の価値観、社会観を観察することができるだろう。

つまり、私は現在、一四〇年前、一〇〇年前の二つの村騒動を裁判所文書から復元し、こうした歴史に埋もれているかにもえながら、その実、現在にまで大きな影響を及ぼしている事件の内容を、一方では法令、勅令と、他方では聞き取り調査結果と比較対照するという作業を行っているが、「オマル・マスリーの反乱」研究は、この農民、農村社会を対象とした同じ作業を遊牧民、遊牧社会についても行おうというのである。

近代エジプトにおいて、農民と遊牧民の境遇は両極端であった。そのため、こうした作業は、中央集権的水利社会として叙述されることの多いエジプト社会像に膨らみをもたせることになろう。

さて、以下の本稿では、こうした「オマル・マスリーの反乱」研究における第三の作業、つまり聞き取り調査の結果の一端を、この作業の有効性と限界を示すため、そして何よりも、この研究の対象であるエジプト遊牧民の特異な価値観、メンタリティを知ってもら

うため、翻訳して紹介したいと思う。なぜこのような聞き取り調査が可能になったかの経緯については省略するが、ともかくこの聞き取りは、一九九一年九月一日、夜の九時から一〇時にかけて、蠟燭とランプの下、オマル・マスリーが眠る、リビア砂漠を背後にひかえたミニヤ県サルムート郡オマル・マスリー館(gharbi)で、館の主シャイフ・ハーリド・アブドルカウイー・マスリーに対してなされたものである。その際、この会合のために仲介を取り、突然の訪問ながら、当日、自らの車で館に案内してくださった、オマル・マスリーの親族の一人、ミニヤ公立病院副院長、ミニヤ県医師会長ガマール・マトリッド博士が同席した。

その内容は、話の焦点を「オマル・マスリーの反乱」に絞ろうとしたにもかかわらず、時間的には中世から現代まで、空間的にはエジプトの国境などないに等しく、スーダン、チャドを含む北アフリカ全域にわたっている。そこには、確かに、幾つかの首を傾げたくないような事実関係の指摘がみられる。そのなかには、サイドの後継エジプト総督を、イスマイルである

べきところをタウフィークとするなど、意図的としか考えられないような間違いもある。とりわけ年代については、相当にいい加減なものであり、話し手にとつての時間の経過とは、ただ彼の一族の家系とのつながりのなかでのみ存在するかの観すらある。そのため、話は一見すると荒唐無稽な英雄譚とすら思える。

しかし、少し調べてみると、「ほんとかいな」と思わせる話にも必ずそれに対応する歴史的事実がある。例えば、バニー・スレイム族の北アフリカへの攻撃の件は、明らかに、アラブ世界で最も有名な英雄物語の一つ、「バニー・ヒラールの生涯」(Sirat Bani Hilal)のバニー・スレイム族版であり、そこでは歴史的事実と伝説とが渾然一体となっている。しかし、話し手がそこに帰属意識をもつバニー・スレイム族はこの伝説のもとになった歴史的事件における主役級の人間集団であり、彼の話が全くのつくりごととはいえないであろう。この点に関して、私が話の途中で吹き出しそうになったのは、話し手がバニー・スレイム族の北アフリカ攻撃の年として余りにも史実と違いすぎるイスラム

暦七五年——実際には四四二年——を主張したときで、彼は回りの人間たちの異議申し立てに、アラブ世界最大の歴史家の一人であり、北アフリカ史研究における最大の典拠の一つとなっているイブン・ハルドゥーンを持ち出して、自分の主張を貫き通したのであった。

このように、話の内容が一見すると荒唐無稽な英雄譚のごとくになったのは、必ずしも話し手が高齢であるからだけではない。ともかく、喋っているのは、オマル・マスリーの館と墓を守っている人物なのである。それだけでも記録する価値はあろう。

しかし、話の内容が内容だけに、それを逐一、歴史的事実と対照しつつ解説するとなると、多くの紙面を必要とする。また、この聞き取りの後、幾人かの別のオマル・マスリー親族の方と情報を交換する機会をもち、そこから得られた情報から、史実との対照とは別の次元で、話しの内容を、近現代エジプト社会におけるオマル・マスリー一族、さらには遊牧民一般の境遇との関係から意義づけることも可能である。しかし、こうした作業は別の機会に譲り、イスラム史、エジブ

ト史について知識のない読者には不親切かもしれないが、事実関係の誤りは正さず、理解を助けるための注釈も、固有名詞について必要最低限の解説を本文の「」のなかで加えるだけで、話の内容を喋られたままの形で採録する。ただし、繰り返しが多い会話であったため、一部不必要な箇所、重複部分を削り、話しの順序を変えたところはある。なお、*の部分は、その場に立ち会ってくれたガマール・マトリド博士の会話である。また、()内の文言は、文意を補うために私が付け加えたものである。

(1) 加藤博「国民軍の編成と遊牧民反乱——エジプト近代史における陰画としての遊牧民——」一橋大学地中研究会編『地中海論集Ⅱ』一九八九年

(2) 加藤博「エジプト農村史研究序説——聞き取り「カフル・シユブラフール村の村方騒動」、
「アフ・スィネータ村醜聞」——」『東洋文化研究所紀要』
第二〇六冊、一九八八年

「オマル・マスリーの反乱」聞き取り結果
——ハーリド・アブドルカウィーの場合

あなたとオマル・マスリーとの関係はどのようなものですか。

「ハーリド・アブドルカウィーとオマル・ベク・マスリーとの関係は、オマル・マスリーが私の曾祖父(Jadd)にあたる。私はハーリド・アブドルカウィー・アリー・オマル・マスリー・ラムルーム・ムハンマド・アブドルナビー (Khalid 'abd al-qawi 'ali 'umar al-misri lamlum muhammad 'abd al-nabi) である。

オマル・マスリーはバニー・スレイム族 (qabila) に属する。つまり、我々はバニー・スレイム一族である。バニー・スレイム族は最も大きな部族の一つである。

バニー・スレイム族の故郷 (manāzil) は、輝くメデ

イナの南であったが、バハレインに移住した。昔は、移住する部族が強い部族であった。一方、弱い部族といえ、彼らは一ヶ所に留まっていた。ともかく、バニー・スレイム族はバハレインに移住したが、(当時)バハレインはカルマト「シーア派イスラムのイスマイール派の一分派」という名の集団に支配されていた。ムダル「バニー・スレイム、バニー・ヒラールがともにそこにたどれるとされる先祖名」の最有力集団 (butun, sing. batin) の一つであるバニー・スレイムは、カルマト(派)と連合した。

(その後)バハレインの周辺の諸部族がカルマト(派)を襲った。そこで、バニー・スレイムは上エジプトに移住した。ミニヤ県へであったかアシュート県へであったか知らない。(ともかく)重要なのは上エジプトへであるということだ。当時、エジプトはファアティマ朝「九〇九—一七一」によって支配されていた。宰相 (wazir) の名はアラズーリー「実際にはヤズーリー」であった。

(ところで)北アフリカ (afriqiya) はイブン・バー

ディース「ベルベル系ジール朝第四代支配者、在位一〇一六—一〇二二年」によって支配されていた。(ある時)ファアティマ朝はイブン・バーディースに、クレナイカ(地方)を自分たちの支配下に置くよう求めた。しかし、イブン・バーディースはこれを拒否し、バグダードのアッバース朝に忠誠を誓った。そこで、対立が生じた。

ファアティマ朝はこの成りゆきに激怒した。ここ(エジプト)のファアティマ朝の支配者である宰相アラズーリーは、イブン・バーディースに言った。我々のところにはバニー・スレイムがいる。彼らはエジプトにきた最大の部族である。我々は彼らを北アフリカに送り出すぞ。バニー・スレイムがイブン・バーディースを襲って、我々がイブン・バーディースから自由になるか、イブン・バーディースがバニー・スレイムを襲って、イブン・バーディースが我々から自由になるかだ。

かくて、バニー・スレイムは出かけて行った。バニー・ヒラール(族)が我々に同行した。主力はバニ

ー・スレイムで、バニー・ヒラールは補助であった。ともかく、こうして我々は北アフリカに向かった。およそイスラム暦の七五年「実際には四四二年」のことだった。

我々はリビアに着き、そこで戦いの日々を送った。そして、チュニジアに入り、そこを征服した。さらに、我々はアルジェリア、マラケシュ、モリタニアと(進撃し)、ベルベル人その他を平定した。その時、我々の先祖(Yadd)ムハンマド・ディープは、ザナーティー・ハリーフア「バニー・ヒラールの生涯」における伝説上のチュニジアの支配者の娘サアダーを娶った。このムハンマド・ディープは、私から一八番目の先祖であり、私からスレイムまで、四二の先祖がいる。(ここでは)一八番目の先祖からだけの話にしましょう。」

我々はオマル・マスリー(の話)を望んでいるのです
が。

「そのうち彼の話になるさ。オマル・マスリーは天

から降ってきたわけでなし、彼は部族から出てきたのだから。

(ムハンマド・ディープは)ザナーティー・ハリーフアの娘サアダーを娶った。彼女から三人(の息子)が生まれた。サッラーム、アッガール、そしてバルグートである。

当時、我々とバニー・ヒラールとの間に(土地)分割協定が結ばれた。バニー・ヒラールは、力ではなくて頭でもって我々を圧倒した。かくて、彼らは、リビアの西国境から西方、チュニジアを取り、バニー・スレイムは、リビアの西国境から東方を取った。エジプトとリビアのすべての部族はバニー・スレイムにたどりつく。つまり、一人の男の子供たちである。

さて、ムハンマド・ディープは三人の子供を残したが、サッラームも、……(略)……という子供を残した。アッガールも子供を残し、彼からアリー、ハルブが生まれた。このアリーからアレクサンドリアとサルムのアウラード・アリー(族)が出た。また、ハルブからハラビー(族)とアブダーン(族)が出た。

(三番目の子供の)バルグートといえ、彼からファ
ーイドとジブリールが生まれた。ファーイドからマガ
ーガのファワーイド(族)が出た。彼らの一部はリビ
アに在る。シブリールからは、多くの子孫が生まれた。
(彼から)我々がその一部であるジャワーズイー(族)
が出た。マガーリバ(族)も出た。リビアのマジャー
バラ(族)、アワージュール(族)、アビード(族)も出
た。つまり、マガーリバ、ジャワーズイー、アワージ
ール、アビード、ジャラーラート、マジヤーバラの六
部族が出た。

また、アリーフという名のジブリールの兄弟が在る。
(彼から)アブナーウ・アリーフという名の部族が出
た。

さて、ジブリールからハムザが生まれたが、この彼
がジャワーズイー(族)の父(父)である。(ハムザか
ら出た部族が)なぜジャワーズイーというかという
彼の妻の名がジャワーズイヤだからである。彼女はイブ
ラヒームを産んだ。家系は連続と続き、イムトリード
まで来た。イムトリードからアブドルナビーが生まれ、

アブドルナビーからラムルームが生まれた。この私は
彼から出た。」

ところで、オマル・マスリーはどこで生まれたので
すか。

「彼はリビアで生まれた。彼の息子アリーもリビア
で生まれた。我々は一八六〇年に、ここに来た。私の
祖父、オマルの息子アリー・ベクは、その時三〇才で
あった。我々の故郷はサルージュとベンガジーであり、
ジャワーズイー(族)はそこを支配していた。」

オマル・マスリーとサイドの対立についてお話し
ください。

「(我々がリビアにいた時)我々とリビアのユーセ
フ・バシヤ・ガラマツリー「一七一一年から一八三五年
にかけてリビアのトリポリタニアを統治したトルコ系のカ
ラマンリー家の支配者」との間に対立が生じた。それは

たぶん、一八〇一年にアメリカの船がやってきた時のことだったと思う。ユーセフ・パシヤは、ジャワーズイー(族)の力と誇りを恐れて「というのも、ジャワーズイー族はアメリカと手を結んだといわれていたので」、アメリカの船がリビアの港に入ることに反対した。ところが、船はやってきて、リビアのダルナ港に入るがままであった。トルコ人であるユーセフ・パシヤ・ガラマツリーとアフマド・パシヤ・ガラマツリー「ユーセフの兄弟」は我々に腹を立てた。(この時)フランス「実際にはイギリス」がユーセフ・パシヤとアメリカの仲介に立ち、両者は和解した。(そのなかで)我々がユーセフ・パシヤの敵となった。我々はユーセフ・パシヤに屈しなかった。トルコ軍が、西方リビア諸部族とともにやってきた。我々はクレナイカ(地方)を支配し、そのの井戸を押さえていた。リビア人たちは、トルコ人たちとともにやってきた。我々とトルコ人、リビア人との間に激しい戦闘が生じた。その後、我々はエジプトに移住した。

(ところが、ここエジプトで)我々とサイド・パシ

ヤとの間に対立が生じた。というのも、サイド・パシヤもまたトルコ人であったからである。リビアの支配者はエジプトのトルコ人支配者の従兄弟であった。かくて、我々とサイド・パシヤとの間に戦闘が生じた。オマル・マスリーはヘディーウ(サイド)に言った。あなたの持ち分はギーザから北である、と。」

このサイド・パシヤとオマル・マスリーの対立はなぜ起きたのですか。

「なぜかって。それは、リビアのトルコ人支配者が独裁的であったからさ。リビアのすべての部族は彼に従っていた。しかし、オマル・マスリーとジャワーズイー族全員だけは違っていた。ジャワーズイー族はイスタンブル出身のユーセフ・パシヤに反対していた。彼らはリビアでジャワーズイー族に戦いを仕掛けた。後に、トルコ軍は、幾つかの小さな部族の助けをかりて、ジャワーズイー族を圧倒した。そこで、ジャワーズイー族で無事に逃げおおせた者たち、つまり我々は、

ここに移住したというわけだ。というのも、彼らは(我々に)妊婦の腹を裂くようなことまでしたのだから。

さて、トルコ人のサイド・バシヤはユーセフ・パシヤ・ガラマツリーの従兄弟だ。彼は(ユーセフに)言った。彼らはあなたを困らせたのだから、(今度は)私が彼らをここエジプトから排除してしましましょう、と。ともかく、対立の根幹は支配をめぐるものだった。一人のトルコ人がリビアを支配するという。ところが、リビアの人々はすべてアラブである。それ故、アラブの誰かが(リビアを)支配しなければならぬ。

(それにもかかわらず)すべてのアラブが(トルコ人に)従った。しかし、オマル・マスリーとジャワーズイー(族)だけはユーセフ・バシヤに敵対した。このことこそが対立の根幹であり、それ以外に原因などない。かくて、オマル・マスリーはエジプトに移った。ところが、(ここエジプトで)ユーセフ・バシヤの親族であるサイド・バシヤが復讐に来了。そこでまた、対立と戦闘となったというわけだ。我々の多くの人間

が殺された。この館(宮殿)も大砲を打ち込まれ、破壊されてしまった。我々は南方に移動した。

アシユートの西、バラートという名の地区で、(サイド・バシヤの軍隊が移動する)我々に追いついた。我々の多くが殺された。しかし、バラートの戦いでは、我々の方が優勢であった。とはいえ、(相手は)トルコ軍だ。我々はスーダンに移住した。」

サイド・バシヤとオマル・マスリーとの間に何があつたのか、もっと詳しくお話してください。

「まさに何が起きたかという点、それは、エジプト総督(afandina)の「アラブも彼と一緒に同じ服を着て戦え」との命令に、オマル・マスリーが同意しなかつたことだ。オマル・マスリーはエジプト総督に「否」といい、(一族は)逃亡した。オマル・マスリーは南に向かい、アシユートに至った。アシユートから西に向かい、ファラフラ(オアシス)を経由して、クレナイカ(地方)に行こうとした。(人々は)オマル・マスリー

一行に、余り使われていない裏道(で行くように)言い、オマル・マスリー一行はその道を一昼夜進んだ。バラート・ジャワーズイーと呼ばれている(村)がある。ほら、外のおその道、運河沿いに行つて東に折れ曲がっている道(の先)だよ。(エジプト総督軍がオマル・マスリー一行を追つて)あちこちと行きつ戻りつした後、その道に着いた。彼らが着いたとき、ジャワーズイー(族)は約一、八〇〇、(これに対して)エジプト総督につき従つた者たちは一六、〇〇〇、彼らはエジプト総督軍とアウラード・アリー(族)からなつていた。このエジプト総督軍がこの道に来たとき、彼らは背後に車と大砲を備えていた。エジプト総督(軍)に弱点が見つけれなかったため、(オマル・マスリー軍は)道の北と南にゲリラ・ポイントをつくり、道にはジャミーウ(族)とアマール(族)からなる四〇〇名と二二名の騎士を立たせた。(しかし)ジャミーウ(族)とアマール(族)は、一六、〇〇〇(の軍隊)とエジプト総督を見たとき、道の西から逃げ、彼らの住まいに帰つてしまった。ジャワーズイー

(族)は、エジプト総督が道に入ったとき、彼に襲いかかった。(しかし)大砲がジャワーズイー(族)を討ち負かした。エジプト総督は道で大砲を打った。ジャワーズイー(族)の一〇一名が死んだ。エジプト総督(軍)の四一六名が死んだ。そして、アウラード・アリー(族)の一〇八名が死んだ。殺された人々の骨はバラートに残っている。かくて、エジプト総督は帰路につき、アシュートで、馬なりでナイルに入って水を飲んだ。」

バラートの戦い後、オマル・マスリーはどうなつたのですか。

「我々はスーダンに長い期間、滞在した。その間に、オマル・マスリーはハルツームの南二〇キロメートルの所で結婚した。現在、そこにはオマル・マスリーの子供である約二〇〇名の男子がいる。彼らは皆、真っ黒(な肌をしている)。彼らは現存している。

我々はクフラという名の地区に滞在した。そこには

チャドからの一群の黒人がいた。その後、リビアから白人が大挙してきた。そこで、我々は南方、チャドへ向かった。そのため、チャド北方にはマスリーという名の地区があり、現在、有名である。

我々は(そこで)長期間、滞在した。そして、その後、我々は再びリビアに入った。その時、我々は数少なかった。というのも、ジャワーズイー(族)のほとんどはここ(エジプト)にいたから。我々と他の部族との間に、再び戦闘が起きた。我々はサブハーとファッザーンに移住した。我々とサイフ・ナスルを支配者とするアウラード・スレイマーン(族)との間に対立が生じた。我々は彼らを相手にせず、ジャールー・ウジャリール「オジラ」という名の地区に行った。ジャールー・ウジャリールに(現在)あるヤシの木は、(もともと)ジャワーズイー(族)が植えたものだ。

この時、一八五八年「実際には一八六三年」、サイード・パシャが死に、タウフィーク「実際にはイスマイール」が彼の後を継いだ。タウフィークが後を継いだ一八五八年の末、彼は言った。我々はオマル・マスリー

とジャワーズイー(族)を必要としている、と。(そこで)使いがオマル・マスリーに送られた。(しかし)オマル・マスリーはタウフィークの所に行くのを断った。(代わりに)アブドルナビール・マスリーがヘディーウ・タウフィークの所に行き、彼と交渉した。タウフィークは言った。オマルはどこにいるのか、と。アブドルナビールは彼に答えた。オマルは来ない。彼に(身の安全を保証する)勅令(Farman)を与えてくれ、と。ヘディーウ・タウフィークから勅令が、彼の数珠とともに与えられた。若い早駆け種の駱駝に乗った一人(の使い)が送られた。彼は一日で一〇日分走った。若い駱駝だったのだよ。かくて、彼がオマルとジャワーズイー一族を連れてきた。

オマルには恩賞、つまりこの地に約六、〇〇〇フェッダーン(の土地)「二フェッダーンは約一エーカー」が与えられた。また、彼は(徴兵免除の)特権を得た。当時、(世情は)混乱し、軍人が土地を(強制的に)耕させられた。(このようなことは)不正(ẓulm)だ。

部族長(shaykh qabila)はオマル・マスリーであっ

た。タウフイーク・パシヤは言った。オマル・マスリーよ。私はそなたに(徴兵免除の)特権を与えよう。

しかし、必要なときには、そなたのアラブの軍人を派遣していただきたい、と。オマル・マスリーは彼に答えた。了承した、と。さらに、タウフイークはオマル・マスリーに言った。そなたたちは兵役を免除されている。しかし、必要なときには協定に忠実な友軍とならねばならない、と。オマル・マスリーは答えた。了承した、と。全てのアラブが軍隊に入らないでよいとの特権を得た。

(その後)オルダンの支配をめぐる、ワッハブ派「十八世紀の半ば以降、アラビア半島に復古的イスラム改革運動を起こしたスンナ派宗派」との戦争が起きた。エジプト軍は敗れた。ジャワーズィー族が派遣された。オマル・マスリーはワッハブ派の首領(zaim)を殺した。彼は(軍事)作戦を統括した。ヘディーウ・タウフイークのオマル・マスリーに対する重要性が増した。

かくするうち、エジプト軍とイギリス軍はスーダン

を征服することを望んだ。しかし、スーダンを征服することは出来なかった。將軍(General)は名をジャルドゥーン「一八八五年にハルツームで、マフディー軍の前に戦死するゴードン將軍」といった。彼らはジャワーズィー族からなる軍団をつくり、それぞれの軍団をジャルドゥーン將軍の名にちなんで、ジャルダ(Jarda)と名付けた。(ジャルダ軍団の)將軍はサンジャル(Sanjari)と呼ばれた。

こうして、ミフターフという名のオマルの息子がサンジャルとしてスーダンに行き、そこを征服した。彼はスーダンのシンディーという名の(都市の)墓地に埋葬された。ミフターフは一人の子供しか残さなかった。彼の名はナアースといい、(オマル・マスリーの館の)なかのモスクに埋葬されている。オマル・マスリー、そして彼の息子キラーニーも(その)モスクに埋葬されている。」

あなたたちがミニヤ県に得た土地は、そもそもはエジプトの西国境を守ることの代償だったと言われている

すが。

「我々は西の国境も、東の国境も守った。つまり、私の祖父の兄弟、オマル・マスリーの息子ミフターフ、彼はスーダンでのジャルドゥーン將軍時代における將軍であった。彼は殺され、スーダンのシンディー墓地に埋葬された。これ全て、エジプトのためだ。」

* 「つまりは、そもそもなぜオマル・ベク・マスリー指揮下のジャワズイー族が重要であったかということ、(彼らが)エジプトの西国境を守り、エジプトのために尽くしたからというわけだ。」

「オマル・マスリーは部族長であった。彼には力があつた。重要な部族の長であつた。彼には土地と駱駝と馬があつた。しかし、羊はなかつた。なぜなかつたかというと、我々は砂漠を押さえており、砂漠で戦うからだ。我々はここエジプトで、その後スーダンで戦つた。また、ある時にはリビアでも戦つた。」

どうして、そのために得た六、〇〇〇フェッターン

(もの土地)が、現在ではなくなつてしまつたのですか。

「一九一一年(までは)オマル・マスリーの息子たちがあり、土地もあつた。オマル・マスリーは(すでに)一八七〇年に死んでいたが。(その一九一一年)イタリヤがリビアを占領した。リビア人たちはパレスチナ難民のようにリビアからエジプトへ移住した。その時の(エジプト)政府は不正の政府、不正なヘディーウたちの政府であつた。(当時)リビア解放軍(の拠点)はエジプトにあつた。彼ら(サヌーシー教団の軍人)たちは我々の所に宿泊し、彼ら軍人の)全ての名前はこのテーブル(Tawala)に書かれている)。彼らは一九四五年までいた。」

こうした状況のなかで、(我々の)土地はフランス不動産銀行に登録され、銀行は(我々の)土地を奪つた。彼らは国連と同じことをした。つまり、(我々の)土地を(リビア)難民たちに分配したのだ。(その時)国家は(難民のために)何かをせねばならなかつたはずだ。

しかし、その時の国家は無能であった。(それはともかく)かくて、以上のことからエジプトは高められ、高い水準に押し上げられた。というのも、(我々)アラブが難民救済局としての役割を果たしたからだ。ある者は七〇フェッダーンとか一〇〇フェッダーン(とかの土地)を与えられ、それを第二夫人に分けるほどであった。」

* 「一九一一年のイタリアとの戦争時にリビア人たちが(エジプトに)来たが、その時には土地がたくさんあり、(我々は)それを二〇年にわたって、家も金も持たずに来た(彼ら)難民たちに分けてやったということだ。彼らもまたオマルの子供たちだから。かくて、このことによって、エジプトは高められたというわけだ。」

タウフィーク・パシャと仲良くなった後、オマル・マスリーはどのような生活をし、いつ死んだのですか。

「彼は一〇年間だけ生きた。そして、一八七〇年に

死んだ。彼は、ヘディーウ(タウフィーク)の指示のもとで、フォアード・トウースーンによって毒殺された。毒殺だよ。コーヒーのなかに毒を入れやがった。こうして、一八七〇年にオマル・マスリーは死に、ミニヤ県サマルト郡、オマル・ベク・マスリーの館の礼拝所に埋葬された。」

つまり、オマル・マスリーは、ジャワーズイー族のシヤイフとして起こした蜂起(Infatada)の後、一〇年間、エジプトで生活したわけですね。

「(タウフィーク・パシャとの)関係は良好であった。しかし、それも毒で終わった。彼らはオマル・マスリーとうまくやっていたが、結局、彼をコーヒー茶碗の毒で殺した。」

* 「結局、関係はごまかしであり、彼らが一八七〇年にオマル・マスリーを毒殺することによって、この関係も終わったということさ。」

(一橋大学教授)